



## 第8回環の縁結びフォーラム報告

昨年10月30日に開催した「第8回環の縁結びフォーラム」—牛乳パックリサイクルに関わる福祉事業所情報交流会—では、全国牛乳容器環境協議会の中村会長をはじめ、紙パックリサイクルに関わる事業者や、福祉現場関係者70余名の方々にご参加いただき、有意義な情報交換がなされました。

このフォーラムは、紙パックリサイクルをさらに進めたい事業関係者と、リサイクル現場の一翼を担いながらも、その意義を認識する余裕がなく厳しい運営を強いられている福祉関係者が互いの立場を理解し協力し合う新たな関係をつくる機会になればと考え企画したものです。以下主な内容を報告します。



来賓として挨拶をされる  
容環協の中村会長

### 基調講演—大阪授産振興センターの取り組み

大阪授産振興センター運営委員長 久澤 貢 氏



平成5年に大阪府の肝いりで障がい者が働く生活出来るようにしようという事で、授産事業復興センターができました。当時、阪急の高槻駅構内に『ふれあい高槻』というショップを作り、阪急電車だけではなく、南海電車にも近鉄電車にも京阪電車にも作って、大阪の東西南北に障がい者が働く場を作ろうと意気込みましたが、中々そういう訳にはいきませんでした。約5年前に再整理して、大阪授産事業振興センターを発足しまして、この中に多くの福祉事業所、無認可、小規模も含めて参加いただいているいます。牛乳パックで紙を作っていたり、和紙を使って紙を作っていたり、あるいは布製品や織製品、食品とか木工製品、革製品など多種多様な各事業所の製品をまとめているというのが振興センターです。

センターの活動は、事業所でしっかりした商品を作るための研修や、売り手であり、そこに携わる職員がどういう意気込みで販売するか、売る為にどうするのか、職員が売る事を援助する、援助者としての意識をしっかりと確保していくための研修もしています。ちょっと売れ行きが悪かったら、しかたない、給料を下げたらいいとい

う発想がまだ根深い状況があります。

一昨年、優先調達推進法という法律が出来て、今自治体や国の関係先から、いろいろな形で提案がありますが、それに応えていくだけの器量をもった組織を作っていくかないといけない。100個、1,000個ではなく、5千・1万という単位での提案がきますが、事業所側がそれに応えきれないのが現状です。その辺の意識を改革して行く事が必要となっています。勿論、利用者への工賃アップにつなげるためでもあります。特に大阪は工賃がとても低く全国の水準に至っていないのが実態です。今、障がい者年金で2級の方は66,000円/月くらいだと思いますが、グループホームを利用すると食費、日用品、家賃などもありますけれども5万前後。そうすると15,000円くらいしか残らない。これで、美容院へ行ったり、服を買ったり、時々喫茶店に行ったり映画を見たりという生活はとても望めない。これをカバーするのは、やはり工賃、給料です。障がい者が社会で暮らしていくためには工賃の底上げを計っていくという事、その為に働いて作って販売をするという、この関連を大事にしないといけないと思っています。

さらに、厚生労働省はじめ国として法定雇用率をアップして、障がい者が働くという事をもっと広めていかないといけない。まだまだ不十分に思います。そういう点では、障がいを持っている方々が働く事をどう社会的な共通認識にしていくのかも重要と思っています。

そして、ひとりの社会人としてどう生活を保証していくのかという課題、これは、事業所の職員が、社会的にもっとアピールをしていかないといけない。経済的自立とよく言われますけれども、障がいを持っている方々もその通りだという事を是非知っていただきたいし、そういう努力をしないといけないと思っています。

また、作っている商品は様々ですが、一般に受け入れられるよう、再度買って使いたい、食べたいと思っていただくよう、私たちが作っている製品に商品価値を持たせていかないといけない。随分この事は議論しました。下手でも一生懸命作っているからいいじゃないか、という意見もあります。見栄えが悪くても中身さえ良ければ、例えば、農薬を使ってないから、添加物を使っていないからいいじゃないかという発想がまだまだ残っています。これをどう乗り越えていくかが、課題としてあります。

最後に今日のテーマにも沿っていると思いますが、やはりリサイクルを通して社会的な責任も担っていかないといけないという事です。私共の振興センターに参加をしている東大阪の作業所が紙パックを必死で集めているという紹介がありましたが、そういう活動に社会的意味をどう持たせていくのかという点でも、我々はリサイクル問題に対してもう少し敏感になってもいいのではないかと思います。

こうした考え方から、私達は単に作って売るだけではなく、やはり繋がっていかないといけないというところに行きます。リサイクルの話をすると、はがきづくりに限定されることも多いですが、もっとコラボをして、作った紙で何かと一緒にセットにしていくとか、いろいろな視点からの製品づくりが可能なはずで、それにはなかなか職員の勉強だけでは足りない。そこで技術や才能を持っておられる専門家の援助が必要になります。企業などの中にもノウハウを持った方が大勢いると思います。だからこんな事やってみないかという提案を是非していただきたい。何かお互いに受け身みたいな所で留まっていると、進んで行かないで、こういう集まりの中での交流を通じて、つながっていければと強く思っているところです。



## 問題提起一とにかく注文下さい！

**紙好き交流センター麦の会 代表 奥上 陽一 氏**



1カ所の作業所だけでは対応できない、数が多くて納期に間に合わない、そうした手すき製品の注文が来た時にみんなで分散して、きちんとした製品をつくって、納期を守る、それを取りまとめているのが交流センターです。今600か所の作業所とネットワークを組んでいます。紙漉き指導の依頼があった全国数百ヶ所の福祉施設、事業所を回って、話をしていますが、お仕事と捉えてしっかりとやっている所のメンバーは、物凄く元気で明るくて生き生きとして、集中力もすごいです。彼らに指導員がしっかりと仕事の内容を伝えて、いいものを作るように指導していけば、素晴らしい製品をつくります。

でも中にはこの程度で十分とか、間に合わないとか、甘えが出てくるところもあるって、それを許していくと品質は確実に落ちていきます。給料が欲しいなら必死でやりなさいという指導を徹底的にやっていくと、本当に素晴らしい物が出来る。たかが紙漉きですが、紙漉きで何十万枚も仕上げるといったら、障がい者が居る施設しかないですし、企業では絶対に無理です。何より障がい者の働く場を確保できます。作り方をきっちり教えたなら北海道の施設でも、沖縄の施設でも、同じ物が上がってきます。今こうして話をしている間でも、鹿児島県徳之島の施設で、漉いてもらっています。紙漉き態勢は万全となっていますので、どんな大量注文でも対応できます。

あと問題は販路です。今日は企業の方の参加も多いので、少量注文でも結構です、注文下さい！！

## 事例報告一 1. 牛乳パックの回収活動について

**NPO 法人みんなの労働文化センター 永岡 亮 氏**



1990年から牛乳パックの回収を始めて、経つこと25年。スーパーや公共施設、小学校などへ牛乳パックの回収に行き、それを問屋さんに入れて製紙工場に売るという事を続けて来ています。また尼崎市と協力して小学4年生に対しての環境授業を行っています。

回収先ですが、スーパー35店舗の内5店舗は市外のスーパーで実質市内は30店舗です。このスーパーの数の推移に実は色々あります、市内で細々とやっていたスーパーが閉店され、そこに大手のスーパーが入る。大手

スーパーは既に回収のシステムを持っているので牛乳パックは出せないと言われる、というのが最近の傾向です。

そのかわりに、幼稚園とか小学校とか、多分先生同士の連携のおかげかと思いますが、拠点数は増えていっています。回収量実績は、2010年53t、11年52t、12年53t、13年55t。2014年は52tと横ばいで、拠点先のバランスがスーパーから幼稚園などへと変わっています。

スーパーで手応えが良いのは、やはり社長さんが店内に居るような地元スーパーです。ウチのメンバーが牛乳パックの回収をしている現場に通りかかるて、他の店にも口聞いてあげようかという事で増えていくこともありました。最近は新しいスーパーを開拓しようと職員が行って話をしても、牛乳パックのリサイクルをゴミ処理と同じようにとらえている感じがあって、スーパーの回収拠点を広げていくのは難しい現状です。

回収は知的障がいのメンバーが車2台に分乗し、尼崎市内を走り回って回収しています。メンバー一人ひとりが、やらされている感は全然なくて、回収に行く、知り合いのおじさんに挨拶して「ご苦労さん」と言ってもらう、こうした毎日繰り返している事に誇りというか、自分の仕事であるという意識を強く持っているように感じています。

ただ慢性的な問題として、小学校など頑張っていた先生が転勤されると、それまでの熱意が消えてしまうことがあります。顔の見える関係で設置している回収拠点なので、人が変わると回収状況が変わる、という課題を抱えています。容環協さん提供の回収ボックスを小学校などに置かせてもらっていますが、子どもたちに好評で、現在リニューアルしたボックスを古いものと交換しながら、回収の継続をお願いしているところです。

新しい取り組みとしては、尼崎市の環境課から回収の活動を祭りで出来ないかという提案があって、恒例となっている尼崎市市民祭りなど地域のお祭りに用意されたエコブースで、携帯電話や家庭廃油の回収と一緒に牛乳パックの回収を行いました。今回の回収量は少量だったので、尼崎市と上手く連携して効果的なPRができたらと思っています。



福祉事業所製品展示コーナー

## 2. コーヒーチェーンの紙パック回収事業 (社福) 笠松あんじや園 文野 弘 氏

福岡県の飯塚市の施設で、設立が昭和41年の11月、県内でも3・4番目に古い施設です。現在事業内容は、法整備が進みいろいろ行っている中で、紙パック製品も作っています。特徴的なのはプロ野球、社会人野球、大学野球で使用した際に折れたバットを粉碎して漉きこんでいます。



紙漉きを始めたころは生産性に問題があつて、平成21年、福祉の就労関係の研修会へ参加した際、紙好き交流センターの取り組みを知り、連絡したところ、酒パックの方が紙漉きの材料として適していると聞きました。県下の酒造メーカーに連絡してもことごとく断られ、そんな中、北九州の門司にニッカウヰスキーがあるとわかり、思い切って問い合わせてみました。快く話を聞いていただき、ラベルのデザインが変わった時に沢山廃棄する未使用パックが出るので、これをいただくことができ、材料の確保ができます。

平成22年から、スターバックスコーヒーの紙パックの回収もさせてもらっています。全国パック連、容環協、紙好き交流センター、山田洋治商店の協力をいただいて、平成22年度の7月から回収を開始しました。現在は週2回、月曜日と金曜日に回収に行っております。回収量実績は1か月に2tから3tくらいで、1回の回収量は大体300kg前後です。回収作業の収入は紙パックの古紙問屋への売却金と、コーヒーチェーン側に回収袋を準備していただき、その回収袋を洗って元の所に戻す維持管理費をコーヒーチェーンからいただいています。当初は福岡市内の4店舗を、朝9時くらいに出て、3時間程をかけて祝日以外は毎日回っていました。それを試験段階で2か月実施した後、牛乳を配送しているセンターに店舗から紙パックを一括して集める事になり、配送センターに回収に行ってます。現在は、福岡県内全域から九州全域分の紙パックを配送センターで集め、新たに設置していただいた回収倉庫にストックしたものを取りに行くという事になって、週2回の回収になっております。

回収の実績ですが、だいたい夏の時期になると回収量が下がる状況で、全体的にも回収量が下がっている状況です。いろいろな方のご協力のおかげで、今の事業ができていますが、まだまだ工賃に繋がっていないという状況なので、引き続き宜しくお願いします。

### 3. 回収と手すき製品づくりで地域と関わる (社福) いこま会かざぐるま 新山 正教 氏

奈良県の生駒市にあります私共の施設は、知的に障がいがある方々に地域生活の場を、という事でサービスを総合的に提供していて、さまざまな仕事や活動の中の一つに紙漉き班があり、牛乳パックや酒パックを中心に回収活動も行っています。



紙漉き班では手漉きはがきや名刺、手漉きハガキを使った箸袋、カレンダー、年賀状、祝箸や正月の製品を中心を作っています。はがきは主に牛乳パックが材料で、アルミ缶と一緒に地域の皆様から回収させていただいております。その他、近隣の小学校に回収ボックスを設置しています。はがきの種類は、白色をはじめ色付き、また手芸班があるので、そちらで要らなくなった糸くずを漉き込んだもの、奈良の大和高原のお茶を煮出したお茶の葉を粉々にして漉き込んだ大和茶入りのハガキなども作っています。

手すき名刺は酒パックや生クリームパックを原料に使っており、優先調達推進法で市役所、県の方から注文をいただけるようになりましたが1・2週間で60人分という大きな注文もあって、それを断ると次が来ないとなるので事業所総出で、何としても商品を作って納品しています。

箸袋の方は、はがきの規格外で薄くなつたものが残り、その紙を有効活用出来ないかという事で作ったものです。

地域のフランス料理店に、箸袋を毎月400枚から1,000枚くらい納めさせていただいている。

正月製品としては卓上のカレンダーを定番に作っていましたが、来年度はA3サイズのカレンダーを作ることになりました。挿絵は四條畷市の絵画作家の先生に描いていただきました。カレンダーの上の留具は和歌山の黒竹を使っています。

地域との関わりの中で、街のケーキ屋さんからの生クリームパックや牛乳パックも回収させていただけるようになりました。一緒にリサイクルを考えて、お店のPOPや名刺作成で協力いただいている。

また年二回行われているカンボジアの学生絵画作品展の画用紙として採用していただき、手すき紙で国際交流に貢献しています。

### 4. シルバーとの連携による紙漉き活動 広陵町エコセンター 所長 吉川 勝規 氏

広陵町は、面積16.33平方キロという小さな町ですが、人口は34,500人程度おりまして、奈良県下では1番大きな町という事になっています。



広陵町のクリーンセンターは、県下で唯一のごみ資源化工場です。可燃ごみを墨にして出荷しているごみ炭化施設です。ですから、牛乳パックも生ゴミの再利用もしようという考え方で、非常に少ない施設を一生懸命運営しています。そのためにはごみを分別していただく必要があり、分別がいかに大事かを行政としてもいろいろ啓発しています。広陵町では、16種類分別で、ほとんどは戸別収集ですが、ただアルミ缶、スチール缶、BIN(無色と色付きのBIN、その他等)、ペットボトルの6種類はリサイクルステーションという回収方法で、それぞれ資源化しています。

シルバーとの連携による牛乳パックの紙漉きの活動は平成23年度から開始しました。焼却場の跡地利用としてリサイクルセンターを設置するという方針が出ていて、そこでどのような活動をしていったらいいか模索していました中で、住民も参加出来る施設がいいだろう、それであれば紙漉きがいいんじゃないかということで、始めました。運営は、シルバーさん3名に当初いろいろ研修を受けていただきました。ただご高齢なので、次の新しい方を指導していただかないとい、紙漉きの設備も使われなくなるので再教育の連鎖を方向づけています。

施設を開いて2年くらいは町民がかなり来場されましたが、昨年度くらいからやっぱり減ってきたので、小学生に呼びかけたところ、親御さんと来るんですね。それで、昨年の夏休みは非常に混雑して、受け入れが大変でした。日ごろシルバーさんが漉いたはがきを田植え祭りや産業振興を兼ねて、町と祭りが合体したかぐや姫祭りに持つて行き、リサイクルセンターの活動のアピールをさせていただいている。こうした活動が少しでもリサイクルを進めるきっかけになればと、考えています。



◎牛乳パックリサイクル・牛乳パック再利用マークについてのお問い合わせは  
**全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 / 牛乳パック再利用マーク普及促進協議会**  
TEL.03-3360-1098 FAX03-3360-7090 E-mail info@packren.org  
ホームページ <http://www.packren.org> 〒164-0003 東京都中野区東中野4-6-7-201  
【牛乳パック110番】フリーダイヤル 0120-89-4704 月～金曜 11:00～16:00